

Peregrine

AssetCenter



インストールとアップグレード

法的制限事項

保証

HP製品およびサービスに対する保証は、当該製品またはサービスに付帯する明示的保証条項でのみ規定されます。

本規定のいかなる部分も、他の保証を構成すると解釈されるものではありません。

HPは本書の技術上または編集上の誤謬、欠落についての責任を負わないものとします。

本書に含まれる内容は、予告なく変更される場合があります。

限定保証条項

機密コンピュータソフトウェア。

保有、使用、コピーを行うには、HPによる有効なライセンスが必要です。

FAR 12.211および12.212準拠。商用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアマニュアル、技術データは、ベンダの標準商用ライセンスに基づき、米国政府にライセンス供与されています。

著作権

© Copyright 1994-2006 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

- Adobe®, Adobe Photoshop® and Acrobat® are trademarks of Adobe Systems Incorporated.
- Corel® and Corel logo® are trademarks or registered trademarks of Corel Corporation or Corel Corporation Limited.
- Java™ is a US trademark of Sun Microsystems, Inc.
- Linux is a U.S. registered trademark of Linus Torvalds
- Microsoft®, Windows®, Windows NT® and Windows® XP are U.S. registered trademarks of Microsoft Corporation.
- Oracle® is a registered US trademark of Oracle Corporation, Redwood City, California.
- UNIX® is a registered trademark of The Open Group.

Peregrine Systems, Inc.
3611 Valley Centre Drive San Diego, CA 92130
858.481.5000
Fax 858.481.1751
www.peregrine.com



目次

PEREGRINE

はじめに	9
本マニュアルの対象ユーザ	9
本マニュアルの使用目的	9
AssetCenterデータの保全性に関する注意	10
1. AssetCenterのコンポーネント	13
2. サポートされる動作環境	15
サポートされるオペレーティングシステム	15
Windowsでの必要最小限の動作環境	16
Windowsで推奨される動作環境	16
サポートされるDBMS	17
3. 旧バージョンをアップグレードする	19
AssetCenterバージョン4.4.0以上のアップグレード - 概要	20
AssetCenterバージョン4.2.xまたは4.3.xをアップグレードする - 概要	21
アップグレード操作の詳細例	23
4. Windowsでのインストール	39
AssetCenterインストール前の注意事項	39
手動インストール (GUI)	42
自動インストールとアンインストール (コマンドライン)	43
手動アンインストール (GUI)	49

5. Windowsでの設定	51
DB2データベース用のCコンパイラ	51
Oracle DLL	52
メッセージシステム	53
AssetCenter Server	54
Crystal Reports	56
Connect-Itを統合する	56
リモートコンピュータのスキャン	57
AutoCADを統合する	57
Get-Answers	60
デモ用データベース	60
6. .iniおよび.cfgファイル	65
使用可能な.iniおよび.cfgファイル	65
「.ini」ファイルを変更する	67
7. 性能の最適化	73
インデックス	75



図の一覧表

PEREGRINE

3.1. 4.2.xまたは4.3.xデータベースのアップグレード - 手順	23
---	----



表の一覧表

PEREGRINE

3.1. AssetCenterバージョン番号別のアップグレードタイプ	19
4.1. MSDE- インストールされたMSDEインスタンスに対するインストール設定	41
6.1. .iniおよび.cfgファイル - 主なファイルの一覧	65
6.2. .iniおよび.cfgファイル - 主なファイルの場所	66
6.3. [OPTION] セクション	68
6.4. [SQL] セクション	69
6.5. [OPTION] セクション	70
6.6. [OPTION] セクション	71
6.7. 「Amdb.ini」ファイルのエントリ	71



はじめに

PEREGRINE

本マニュアルの対象ユーザ

本書はAssetCenter 4.4.2を使用するすべての企業を対象に書かれています。
本書は特に以下のことを実行するエンジニアを対象としています。

- AssetCenterの新規インストール
- 旧バージョンのAssetCenterをアップグレードする

本マニュアルの使用目的

このマニュアルの内容は以下のとおりです。

- AssetCenterを構成するプログラム
- AssetCenterの動作環境
- 旧バージョンのAssetCenterのアップグレード方法
- AssetCenterを初めてインストールする方法
- AssetCenterの設定方法
- AssetCenterの性能の最適化

 **重要項目:**

本書で説明されている手順には忠実に従ってください。

CD-ROMを挿入すると表示される画面で、インストールするコンポーネントを選択します。

本書では、次のプログラムのインストール方法のみが説明されています。

- AssetCenterのインストール
- Microsoft MSDEのインストール

他のプログラムのインストール方法については、各プログラムの付属マニュアルを参照してください。

AssetCenterデータの保全性に関する注意

AssetCenterは多彩な機能を搭載しています。この多機能は、複雑な構造のデータベースを使用することにより実現されています。

- データベースは大量のテーブル、フィールド、リンク、およびインデックスで構成されます。
- 一部の中間テーブルは、グラフィカルインタフェースには表示されません。
- 一部のリンク、フィールドとインデックスは、ソフトウェアにより自動的に作成、削除または変更されます。
- ユーザはテーブル、フィールド、リンクやインデックスを追加作成することができます。

データベースの保全性を保護しつつその内容を変更する場合、以下のアプリケーションの内の1つを使用する必要があります。

- Windowsインタフェース
- AssetCenter API
- AssetCenter Import
- Webインタフェース
- Peregrine Systemsゲートウェイ
- Connect-It
- AssetCenter Server

データベースの保全性を保護しつつその構造を変更する場合、AssetCenter Database Administratorを使用する必要があります。

 **警告:**

データベースの内容や構造を、ソフトウェア用にあらかじめ用意された方法以外の手段で変更してはなりません。不適切な方法で変更すると、データベースが破損し、以下の問題が発生する可能性があります。

- データやリンクが勝手に削除または変更される
- 架空のリンクやレコードが作成される
- 重大なエラーメッセージが発生する

1 | AssetCenterのコンポーネント

AssetCenterのパッケージ

プログラム名	プログラムの インタフェース	Windowsのサポート
AssetCenterデータベースへのアクセス用Windowsインタフェース（下記注意を参照）	グラフィック	可
AssetCenter Export	グラフィック コマンドライン	可 可
AssetCenter Import	コマンドライン	可
AssetCenter Server	グラフィック コマンドライン	可 不可
AssetCenter Database Administrator	グラフィック コマンドライン	可 可
AssetCenter API	非グラフィック	可
Desktop Inventoryスキャナ	非グラフィック	可

プログラム名	プログラムの インタフェース	Windowsのサポート
AutoCAD統合	グラフィック	可
AssetCenter Script Analyzer	グラフィック	可
ログビューア	グラフィック	可

注意:

AssetCenter Windowsインタフェースでは、以下のモジュールにアクセスできません。

- ポートフォリオ
- 契約
- ソフトウェアライセンス
- ファイナンス
- 経費付替え
- 調達
- ケーブル
- バーコードによる棚卸
- 管理
- 自動化
- 整合性

モジュールへのアクセスの可否は、AssetCenter付属のライセンスファイル「license.cfg」の内容に応じて異なります。

周辺プログラム

以下のソフトウェアはAssetCenterに統合可能です。

- AutoCAD
- Connect-It
- Crystal Reports
- Desktop Inventory
- Network Discovery
- Enterprise Discovery
- Get-Answers
- Get-Resources
- AssetCenter Web



2 | サポートされる動作環境

サポートされるオペレーティングシステム

AssetCenterクライアントプログラム

AssetCenterクライアントプログラムは次のオペレーティングシステムをサポートします。

- Windows

サポートされるオペレーティングシステムを確認するには、Webサイト <http://support.peregrine.com> で動作環境の表を参照してください。

AssetCenterデータベースサーバ

サーバは、DBMSにサポートされている全オペレーティングシステムとハードウェアプラットフォーム上で機能します。

DBMSにサポートされているオペレーティングシステムとハードウェアプラットフォームのリストは、DBMSのマニュアルを参照してください。

Windowsでの必要最小限の動作環境

AssetCenter Server以外の全プログラム

環境	Windows 95、98とME	Windows NT 4、2000とXP
CPU	Pentium II 300	Pentium II 400
RAM	32 MB	256 MB
ディスク空き容量 (*)	1 GB (全パッケージをインストール)	1 GB (全パッケージをインストール)

(*) AssetCenterと共にインストールされるファイル(クライアントのみ)が必要とするディスク容量は約220MBです(プロダクション用データベースとデータベース層を除く)。

AssetCenter Server

環境	Windows NT 4、2000とXP Professional Edition
CPU	Pentium III 500
RAM	AssetCenter Server用に256 MB
ディスク空き容量	500 MB

Windowsで推奨される動作環境

AssetCenter Server以外の全プログラム

環境	Windows 95、98とME	Windows 2000、XPとServer 2003
CPU	Pentium II 400	Pentium III 500
RAM	96 MB	512 MB
ディスク空き容量 (*)	2 GB (全パッケージをインストール)	2 GB (全パッケージをインストール)

(*) AssetCenterと共にインストールされるファイル(クライアントのみ)が必要とするディスク容量は約30MBです(本番データベースとデータベース層を除く)。

AssetCenter Server

環境	Windows NT 4、2000とXP Professional Edition
CPU	Pentium III 1 GHz
RAM	AssetCenter Server用に1 GB
ディスク空き容量	1 GB
ネットワーク	DBMSサーバとの高速リンク（例：Ethernet 100 Mbps、Gigabit）と最短待ち時間（<5 ms）

サポートされるDBMS

AssetCenterデータベースでは、以下のDBMSがサポートされています。

- Microsoft SQL Server



注意:

MSDEバージョンもサポートされますが、デモ用データベースの使用に限られます。

- Oracle Database Server
- Sybase Adaptive Server
- IBM DB2 UDB

サポートされるDBMSのバージョン（サーバ、クライアント、ネットワークプロトコル、ドライバ、など）を確認するには、Webサイト<http://support.peregrine.com> [<http://support.peregrine.com>]で動作環境の表を参照してください。



警告:

動作環境の表に記載されているバージョンまたはサービスパック以外（以降も含む）のDBMSでAssetCenterを使用すると、正常に機能しない場合があります。



警告:

それぞれのベンダがサポートしなくなったバージョンまたはサービスパックでAssetCenterを使用すると、正常に機能しない場合があります。

3 | 旧バージョンをアップグレードする

アップグレードタイプは、インストール済みのバージョンによって異なります。

表 3.1. AssetCenterバージョン番号別のアップグレードタイプ

アップグレードするバージョンの番号	実施する操作のタイプ	参考マニュアル
バージョン4.0.0以上	簡易アップグレード	本章
バージョン4.2.xまたは4.3.x	標準的な状況では、簡易アップグレードで十分です。 簡易アップグレードが失敗した場合は、簡略マイグレーションを実施する必要があります。	本章 『マイグレーション』ガイド
バージョン4.1.x以上	完全マイグレーション	『マイグレーション』ガイド

AssetCenterバージョン4.4.0以上のアップグレード - 概要

アップグレードの理由

AssetCenterの変更箇所は、旧バージョン（4.4.0以上）と4.4.2の間で少ししかありません。

- データベースの構造：
特定の構造パラメータ（例：デフォルト値）が変更されました。
ただし、テーブル、フィールドおよびリンクに関しては、一切追加/削除されていません。
- プログラムが少々変更されました。

必須要素

アップグレード手順は比較的簡単であり、以下のことが必要です。

- AssetCenterの知識（インストール、管理）
- 準備
- 技術的能力：データベース管理
- メソッド

アップグレード手順

- 1 旧フォーマットの本番データベースのバックアップコピーを作成します。
- 2 旧フォーマットの本番データベースをブロックします。
▶ [旧フォーマットの本番データベースをブロックする \[修職1\]](#)
- 3 AssetCenterプログラムをアップグレードします。
▶ [AssetCenterプログラムを更新する \[修職3\]](#)
- 4 バージョン4.4.2システムデータをインポートします。
▶ [バージョン4.4.2システムデータをインポートする \[修職7\]](#)
- 5 4.4.2フォーマットの本番データベースでAssetCenter Serverを開始します。
- 6 4.4.2フォーマットの本番データベースにアクセスする外部プログラムを再起動します。
- 7 データベースが使用可能であることをユーザに通知します。

AssetCenterバージョン4.2.xまたは4.3.xをアップグレードする - 概要

アップグレードの理由

- 標準データベース構造（テーブル、フィールド、リンク、およびインデックス）が変更されました。
- 新しい機能が追加されました。

アップグレード手順の構成

アップグレードが必要になるのは、以下です。

- 旧フォーマット本番データベースから4.4.2フォーマットのデータベースに
- AssetCenterプログラムをバージョン4.4.2に

必須要素

アップグレード手順は比較的簡単であり、以下のことが必要です。

- AssetCenterの知識（インストール、管理）
- 準備
- 技術的能力：データベース管理
- メソッド

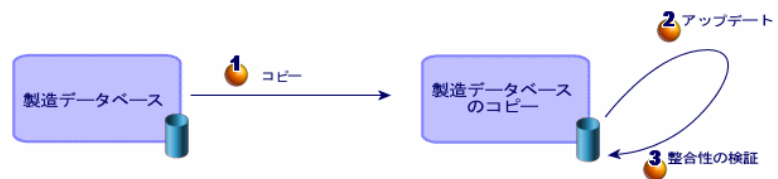
アップグレード手順

- 1 アップグレード対象コンピュータを準備します。
 - ▶ アップグレード対象コンピュータを準備する [[修職3](#)]
- 2 旧フォーマットの本番データベースを準備します。
 - 1 旧フォーマットの本番データベースの健全性を検証します（オプション）。
 - ▶ 旧フォーマットの本番データベースの整合性を検証する [[修職5](#)]
 - 2 必要に応じて、旧フォーマットの本番データベースに調整を加えます。
 - ▶ 旧フォーマットの本番データベースを手動により調整する [[修職6](#)]

- 3 旧フォーマットの本番データベースのコピーに対して、アップグレードをテストします。
 - 1 旧フォーマットの本番データベースをコピーします (1)。
 - ▶旧フォーマットの本番データベースをコピーする [修験7]
旧フォーマットの本番データベースのコピーに対してアップグレードをテストしているときに、ユーザは旧フォーマットの本番データベースの使用を続行することができます。
 - 2 旧フォーマットの本番データベースのコピーをアップグレードします (2)。
 - ▶旧フォーマットの本番データベースのコピーをアップグレードする [修験8]
アップグレードプログラムにエラーメッセージが表示されない場合は、本章に記載されているようにアップグレードを続行できます。
アップグレードプログラムにエラーメッセージが表示される場合は、『マイグレーション』ガイドに記載されているように簡略マイグレーション手順を実施する必要があります。
この場合、本章に記載されるアップグレード手順は適用できません。
 - 3 4.4.2フォーマットの本番データベースの整合性を検証します (3)。
 - ▶4.4.2フォーマットの本番データベースの整合性を検証する [修験0]
プログラムで問題が発生した場合は、必要に応じて旧フォーマットの本番データベースに修正を加えて、最新バージョンの旧フォーマットの本番データベースのコピーに対してテストを再開します。
エラーメッセージがない場合は、次のステップに進みます。
- 4 新しい旧フォーマットの本番データベースのコピーを使用して最終アップグレードを実施します。
 - 1 旧フォーマットの本番データベースをブロックします。
 - ▶旧フォーマットの本番データベースをブロックする [修験1]
 - 2 旧フォーマットの本番データベースのコピーを作成します (1)。
 - ▶旧フォーマットの本番データベースをコピーする [修験7]
 - 3 旧フォーマットの本番データベースのコピーをアップグレードします (2)。
 - ▶旧フォーマットの本番データベースのコピーをアップグレードする [修験8]
 - 4 4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーについて整合性を検証します (3)。
 - ▶4.4.2フォーマットの本番データベースの整合性を検証する [修験0]
 - 5 必要に応じて、4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーを最終処理するために調整を加えます。
 - ▶4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーの最終処理 [修験1]

- 5 AssetCenterプログラムをアップグレードします。
 - ▶ AssetCenterプログラムを更新する [惨融3]
 - 6 必要に応じて、AssetCenterデータベースにアクセスする外部プログラムのアップグレードを実施します。
 - ▶ AssetCenterデータベースにアクセスする外部プログラムをアップグレードする [惨融5]
 - 7 4.4.2フォーマットの本番データベースで、AssetCenter Serverを開始します。
 - 8 4.4.2フォーマットの本番データベースにアクセスする外部プログラムを再起動します。
 - 9 データベースが使用可能であることをユーザに通知します。
- 次に示すのは、4.2.xまたは4.3.xデータベースのアップグレードの主なステップです。

図 3.1. 4.2.xまたは4.3.xデータベースのアップグレード - 手順



アップグレード操作の詳細例

ここでは、上記の概要に記載したステップを詳細に説明します。

警告:

お客様の環境に適した操作のみを行ってください。

アップグレード対象コンピュータを準備する

旧フォーマットの本番データベースをアップグレードする前に、適切なアップグレード対象コンピュータを準備する必要があります。

本章では、アップグレード対象コンピュータにインストールする必要があるものをすべて説明します。

旧フォーマットの本番データベースに対応するバージョンのAssetCenterをインストールする

これは、以下の旧フォーマットのデータベースへアクセスするために必要になります。

- 本番データベース
- 本番データベースのコピー

少なくとも基本モジュールをインストールします。

旧フォーマットの本番データベースにアクセスできることを確認する

以下の操作を行うために、データベースへのアクセス権限が必要です。

- アップグレード用に旧フォーマットの本番データベースを準備します。
- シミュレート用に旧フォーマットの本番データベースのコピーを作成し、アップグレードを実施します。

AssetCenter 4.4.2をインストールする

少なくとも以下のコンポーネントをインストールします。

- AssetCenterクライアント
- AssetCenter Database Administrator
- マニュアル
- ログビューア
- マイグレーション
- データキット
- AssetCenter Export

変換速度を左右する要素

- DBMSの性能
- AssetCenter Database Administratorのコンピュータと、旧フォーマットデータベースのコンピュータ間のデータ転送速度
- AssetCenter Database Administratorと、旧フォーマットデータベースがインストールされているコンピュータの性能（上記の要素ほど大切ではありません）

 ヒント:

旧フォーマットの本番データベースのサイズが大きい場合、AssetCenter Database Administratorがインストールされているコンピュータと、旧フォーマットのデータベースをできる限り近づけなければなりません（例えばWANを経由しない、など）。特に長いフィールドやバイナリデータを含むテーブルでは注意が必要です（例：amComment、amImage）。

旧フォーマットの本番データベースの整合性を検証する

1

 重要項目:

旧フォーマットの本番データベースのバックアップコピーを作成します。

2 まず第一に旧バージョンのAssetCenter Database Administratorを使って、整合性を検証します。

- 1 旧バージョンのAssetCenter Database Administratorを起動します。
- 2 旧フォーマットの本番データベースに接続します（ [ファイル / 開く / 既存のデータベースを開く] メニュー）。
- 3 データベースの診断画面を表示します（ [アクション / データベースの診断 / 修復] メニュー）。
- 4 テーブルのリストで [(すべてのテーブル)] を選択します。
- 5 ログファイルの名前とパスを指定します。
- 6 [レコードの整合性のチェック] オプションを選択します。
- 7 [修復] オプションを選択します。
- 8 [実行] をクリックします。
- 9 実行画面のメッセージを確認します。
- 10 必要に応じて、ログファイルの内容を確認します。

 ヒント:

ログビューアを使用すると、ログファイルを閲覧できます。

3

 **警告:**

旧フォーマットの本番データベースのDBMSがDB2である場合、以下の検証作業を行う必要はありません。

2番目の検証を4.4.2フォーマットのAssetCenter Database Administratorに実施します。

- 1 AssetCenter Database Administrator 4.4.2を起動します。
- 2 旧フォーマットの本番データベースに接続します ([ファイル/開く/既存のデータベースを開く] メニュー) 。

 **注意:**

AssetCenter Database Administrator 4.4.2を使用して旧フォーマットのデータベースに接続することは、まったく問題ありません。

- 3 データベースの診断画面を表示します ([アクション/データベースの診断/修復] メニュー) 。
- 4 テーブルのリストで [(すべてのテーブル)] を選択します。
- 5 ログファイルの名前とパスを指定します。
- 6 [レコードの整合性のチェック] オプションを除くすべての検証オプションを選択します。
- 7 [修復] オプションを選択します。
- 8 [実行] をクリックします。
- 9 実行画面のメッセージを確認します。
- 10 必要に応じて、ログファイルの内容を確認します。

 **ヒント:**

ログビューアを使用すると、ログファイルを閲覧できます。

分析/修復プログラムの詳細については、マニュアル『管理』の「データベースの診断と修復」の章を参照してください。

旧フォーマットの本番データベースを手動により調整する

旧フォーマットの本番データベースのアップグレードを正確に実施するために、最初に特定データ項目を変更する必要があります。

[amCounter] テーブルを更新する

本節の内容は、[amCounter] テーブルを管理する up_GetCounterVal ストアドプロシージャを、以下のテクノートの指示に従って変更したユーザを対象としています。

- Microsoft SQL Server TN317171736
- Sybase Adaptive Server TN941931
- Oracle Database Server TN12516652

上記のテクノートの指示通りに変更を実行した場合、up_GetCounterVal ストアドプロシージャは、[amCounter] テーブルの一部のレコードを更新できなくなります。

旧フォーマットの本番データベースをアップグレードする前に、まず次のことを行います。

- 1 アップグレード後に同じように up_GetCounterVal ストアドプロシージャを変更したい場合は、そのコピーを作成します。
- 2 [amCounter] テーブルから別のテーブルへ派生されたカウンタを手動で変更します。
- 3 up_GetCounterVal ストアドプロシージャを、初期状態に戻します。

調達モジュールとワークフローモジュール

アップグレード前に実行中のプロセス（一部の発注受領、返却予定資産、現在のワークフローなど）の数を減らすことをお勧めします。

警告:

また、アップグレード後に問題が発生した場合に参照できるように、旧フォーマットの本番データベースのバックアップコピーを作成することをお勧めします。

旧フォーマットの本番データベースをコピーする

従来のコピーの問題点

DBMSのツールを使って旧フォーマットの本番データベースをコピーする場合、AssetCenter Database Administrator以外のツールで実行された以下の要素の追加、変更または削除もコピーされるため、旧フォーマットの本番データベースのコピーは元のデータベースと同一になります。

- インデックス
- トリガ
- ストアドプロシージャ
- ビュー

これらの構造の変更は、アップグレードプログラムで対応することができません。

このため旧フォーマットの本番データベースの変換前に、構造の変更事項を取り消す必要があります。

ここで述べるように、DBMSツールを使用してコピーを作成し、構造の変更を取り消すことをお勧めします。

 **注意:**

旧フォーマットの本番データベースのコピーは、アップグレード対象コンピュータからアクセスできる必要があります。

データベースのコピーの作成方法については、DBMSの付属マニュアルを参照してください。

DBMSツールによる旧フォーマットの本番データベースのコピー

- 1 DBMSツールで旧フォーマットの本番データベースをコピーします。
作成されたコピーは、元の旧フォーマットの本番データベースと全く同一です。
- 2 以下の要素に実行された全変更事項を取り消します。
 - インデックス
 - トリガ
 - ストアドプロシージャ
 - ビュー
- 3 旧フォーマットのシミュレーション用データベースへ、AssetCenter接続を作成します。

旧フォーマットの本番データベースのコピーをアップグレードする

次の手順で、旧フォーマットの本番データベースのコピーをアップグレードします。

- 1 AssetCenter Database Administratorバージョン4.4.2を起動します。

- Adminログインで旧フォーマットのデータベースのコピーに接続します（ [ファイル / 開く / 既存のデータベースを開く] ）。

 **重要項目:**

AssetCenterの接続の詳細画面では、以下の点に注意します。

- [所有者] フィールドに値を入力してはなりません。
- [ユーザ] フィールドは、データベーステーブルの所有者であるユーザ（データベースの全種オブジェクトの作成権限があるユーザ）を参照しなければなりません。
- Microsoft SQL Serverでは、テーブルの所有者がdboである場合、接続ログインは、dbo.<テーブル>の形でデフォルトのテーブルを作成しなければなりません（特にログインsaの場合）。

- [マイグレーション / データベースを更新] を選択します。

 **注意:**

旧フォーマットの本番データベースがマルチリンガルである場合（▶ 『管理』ガイド、「AssetCenterデータベースの作成、変更、削除」の章、「AssetCenterクライアント言語」の節）、ウィザードのいずれかのページによって旧フォーマットの本番データベースの追加言語に加えられたカスタマイズを伝達することができます。これには、AssetCenterバージョン4.4.2が各追加言語バージョンで使用可能であり、変換に使用するコンピュータにこれらの言語のAssetCenterをインストールすることが必要です。

フィールドおよびリンクのコンテキストヘルプを除いて、すべてのマルチリンガル要素が伝達されます。

言語Xへのカスタマイズを自動的に伝達するには、この言語に対してAssetCenterが使用可能になる必要があります。

既に使用可能になっている言語でアップグレードを実行することもできますが、言語Xに対するカスタマイズを伝達することはできません。その言語に対してAssetCenter 4.4.2が使用可能になったときに、言語Xを4.4.2フォーマットの本番データベースに挿入します。旧フォーマットの本番データベースに行ったカスタマイズは、手動で伝達する必要があります。

- ウィザードに表示される指示に従います。

 ヒント:

[ユーザタイプ] パラメータが [コメント] であるフィールドをアップグレードするには、相当時間がかかります (大規模データベースの場合で数時間が必要です)。

この段階でメッセージが表示されないため、アップグレードプロセスが実行中であるかどうか疑問に思うかもしれません。

これを確認するには、アップグレード対象コンピュータまたはデータベースサーバのシステムアクティビティ (CPUまたはI/Oレベル) を調査します。

-
- 5 変換ログファイル「sdu.log」を参照します。

4.4.2フォーマットの本番データベースの整合性を検証する

- 1 AssetCenter Database Administrator 4.4.2を起動します。
- 2 4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーに接続します ([ファイル / 開く]、[既存のデータベースを開く] オプション)。
- 3 データベースの診断画面を表示します ([アクション / データベースの診断 / 修復] メニュー)。
- 4 テーブルのリストで [(すべてのテーブル)] を選択します。
- 5 ログファイルの名前とパスを指定します。
- 6 [レコードの整合性のチェック] オプションを除くすべての検証オプションを選択します。
- 7 [解析のみ] オプションを選択します。
- 8 [実行] をクリックします。
- 9 実行画面のメッセージを確認します。
- 10 必要に応じて、ログファイルの内容を確認します。

 ヒント:

ログビューアを使用すると、ログファイルを閲覧できます。

分析/修復プログラムの詳細については、マニュアル『管理』の「データベースの診断と修復」の章を参照してください。

旧フォーマットの本番データベースをブロックする

「旧フォーマットの本番データベースをブロックする」とは、アップグレードの最中に変更が加えられないために旧フォーマットの本番データベースを使用できないようにすることです（この場合、変更については考慮されません）。

以下の操作を行います。

- 1 すべてのユーザの旧フォーマットの本番データベースへの接続を解除します。
- 2 以下のプログラムを終了します。
 - AssetCenter Server
 - AssetCenter API
 - 旧フォーマットの本番データベースにアクセスする外部データベース
- 3 旧フォーマットの本番データベースへのアクセスをブロックします。

4.4.2 フォーマットの本番データベースのコピーの最終処理

アップグレード正常終了の確認

アップグレード処理が正常に行われたことを確認することをお勧めします。

確認するには以下の方法があります。

- 4.4.2フォーマットのデータベースのコピーに目を通して、明らかにおかしい点がないか探します。
- 一部のテーブルのレコード数をアップグレード前後で比較します。

ストアドプロシージャup_GetCounterValの変更

本節の内容は、旧フォーマットの本番データベースでup_GetCounterValストアドプロシージャを変更したユーザを対象としています。

旧フォーマットの本番データベースをアップグレードする前に、次の作業を実行します。

- 1 [amCounter] テーブルから別のテーブルへ派生されたカウンタを手動で変更します。
- 2 up_GetCounterValストアドプロシージャを、初期状態に戻します。

以下のテクノートの指示に従って、up_GetCounterValストアドプロシージャを新規に調整します。

- Microsoft SQL Server TN317171736

- Sybase Adaptive Server TN941931
- Oracle Database Server TN12516652

フィールドのヘルプ (オプション)

フィールド (とリンク) のヘルプは [フィールドのヘルプ] (SQL名: amHelp) テーブルに格納されています。

アップグレード処理でこのテーブルの内容は変更されません。

フィールドのヘルプをアップグレードしたい場合は、『マイグレーション』ガイドの「段階を追ってマイグレーションを実行する - 最終変換 (移行データベース)」の章、「手順20-4.4.2フォーマットの移行データベースを最終確認する」の節、「すべてのバージョンの旧フォーマットの本番データベースに関する最終確認」、「ヘルプのフィールド」を参照してください。

AssetCenter 4.4.2付属の標準レポートをインポートする

[サンプルデータ] に含まれるレポートを、4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーにインポートするには、

- 1 AssetCenter Database Administratorを起動します。
- 2 [ファイル / 開く] を選択します。
- 3 [データベース記述ファイルを開く (新規データベースの作成)] オプションを選択します。
- 4 AssetCenter 4.4.2のインストール先フォルダの「config」サブフォルダの「標準4.4.2 gbase.xml」ファイルを選択します。
- 5 [アクション / データベースの作成] を選択します。
- 6 次のようにウィザードのページに入力します (ウィザードページを [次へ] と [戻る] で移動します)。

[SQLスクリプトの生成/データベースの作成] ページ :

フィールド	値
データベース	4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーを選択します。
作成	専門分野データをインポートします。
高度な作成オプションを使用	このオプションは選択しません。

[作成パラメータ] ページ :

フィールド	値
パスワード	<p>管理者のパスワードを入力します。</p> <p>注意:</p> <p>AssetCenterデータベース管理者は、[名前] (Name) フィールドが「Admin」に設定されている [部署と従業員] (amEmplDept) テーブルのレコードです。</p> <p>データベース接続ログインが [ユーザ名] (UserLogin) フィールドに保存されています。管理者名は「Admin」です。</p> <p>パスワードが [パスワード] フィールド (LoginPassword) に保存されています。</p>

[インポートするデータ] ページ :

フィールド	値
使用可能データ	[Crystal Reports] オプションを選択します。
エラー発生時にインポートを中止	このオプションは、問題が発生したときにインポートを中止する場合に選択します。
ログファイル	エラーや警告などすべてのインポート操作を記録するファイルの完全名。

7 ウィザードで定義されたオプションを実行します ([終了])。

ユーザ権限、アクセス制限、ユーザプロファイル

データベース構造が変更されたため、ユーザ権限、アクセス制限、およびユーザプロファイルに変更を加える必要があります。

新しいテーブルとフィールドを既存のユーザ権限とユーザプロファイルに追加し、必要に応じて新しい権限と制限を作成します。

AssetCenterプログラムを更新する

管理用コンピュータとクライアントコンピュータで、AssetCenterプログラムを更新する必要があります。

AssetCenterと共に使用するプログラムのバージョンが、AssetCenter 4.4.2と互換性があるかどうか確認します。必要に応じて、プログラムのアップグレードを実行します。

AssetCenterプログラムの一覧と、AssetCenterと共に使用するプログラムの一覧について : ▶ [AssetCenterのコンポーネント](#) [参考文献]

AssetCenter 4.4.2と互換性のあるプログラムのバージョンを確認するには、ペレグリンシステムズのカスタマサポートのサイトを参照してください。

 **ヒント:**

互換性については、このガイドの▶「[Windowsでの設定 \[惨赫1\]](#)」の章も参照してください。

AssetCenter Serverを管理用コンピュータにインストールする

AssetCenter Serverは、AssetCenterデータベースにおける全ての自動処理機能タスクを実行します。AssetCenter Serverが起動されていない場合、AssetCenterは正しく作動しません。

このため、以下の操作を行う必要があります。

- 1 AssetCenter Serverをクライアントコンピュータにインストールします。
- 2 AssetCenter Serverを設定します。
- 3 AssetCenter Serverを常時稼動にします。

AssetCenter Serverの使用については、マニュアル『[管理](#)』の「[AssetCenter Server](#)」の章を参照してください。

4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーにあるAssetCenterキャッシュを削除する

4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーに接続するためにキャッシュを使用している場合は、削除することをお勧めします。

キャッシュに関する詳細は、マニュアル『[はじめに](#)』の「[参考情報](#)」の章、「[接続 / AssetCenterのパフォーマンス](#)」の節を参照してください。

AssetCenterプログラムを更新する

プログラムをアップグレードするには

- 1 前のバージョンのAssetCenterをアンインストールします。
-

 **ヒント:**

AssetCenter 4.4.2を変換用コンピュータにインストールする場合、当面の間は以前のバージョンのAssetCenterをアンインストールしないようにしてください。

アンインストール手順に関する情報（安全策、実行するステップ、AssetCenterを削除する方法）については、削除するAssetCenterに対応したマニュアル『インストール』を参照してください。

2 AssetCenter 4.4.2をインストールします。

インストール手順に関する情報（注意事項、方法、AssetCenterインストールの各種方法）については、このガイドの他の章を参照してください。

注意:

AssetCenter 4.4.2インストールプログラムでは、AssetCenter 4.3.2以前のインストール済みバージョンが検索されません。

AssetCenterが正常に起動することを確認する

AssetCenter 4.4.2の起動時に問題が発生した場合は、ユーザサポートに連絡してください。

古い接続を削除して、新しい接続を作成する

この目的は、4.4.2フォーマットの本番データベースのコピーにユーザが確実に接続することです。

マニュアル『はじめに』の「参考情報」の章、「接続」の節を参照してください。

古い接続を変更することも可能です。

必要に応じて、接続用にAssetCenterキャッシュを作成します。

AssetCenterデータベースにアクセスする外部プログラムをアップグレードする

AssetCenter Web

AssetCenter Webを4.4.2バージョンに更新します。

AssetCenter Webの標準ページのみを使用していた場合は、この操作で十分です。これにより、AssetCenter Webの新規の標準ページを使用ようになります。

追加Webページを作成した場合、または標準Webページをカスタマイズした場合は、以下の手順に従います。

- 1 追加ページまたはカスタムページを保存します。
- 2 AssetCenter Webを4.4.2バージョンに更新します。
- 3 各Webページをテストし適応するように変換します。

Get-It

Get-Itで開発されたWebアプリケーションがAssetCenter 4.4.2データベースで機能するには、

- 1 AssetCenter 4.4.2の動作環境の表（ペレグリンシステムズのカスタマサポート用Webサイト参照）に、使用中のGet-Itのバージョンがあるかどうかを確認します。
- 2 必要に応じてGet-Itを更新します。
- 3 各カスタムWebページをテストし、適応するように変換します。

Get-Resources

Get-ResourcesをAssetCenter 4.4.2データベースと連携させるには、

- 1 AssetCenter 4.4.2の動作環境の表（ペレグリンシステムズのカスタマサポート用Webサイト参照）に、使用中のGet-Resourcesのバージョンがあるかどうかを確認します。
- 2 必要に応じてGet-Resourcesを更新します。

Get-Resourcesの標準ページのみを使用していた場合は、この操作で十分です。これにより、Get-Resourcesの新規の標準ページを使用するようになります。

追加Webページを作成した場合、または標準Webページをカスタマイズした場合は、以下の手順に従います。

- 1 追加ページまたはカスタムページを保存します。
- 2 必要に応じてGet-Resourcesを更新します。
- 3 各カスタムWebページをテストし、適応するように変換します。

Connect-Itのシナリオ

Connect-Itを使って4.4.2フォーマットのデータベースのコピーにアクセスするには、AssetCenter 4.4.2付属のConnect-Itのバージョンを使用しなければなりません。

Connect-Itの既製シナリオを使用していた場合、移行後は新規の既製シナリオを使用します。

独自のシナリオを作成した場合は、

- 1 既製シナリオ以外の旧シナリオを保存します。
- 2 Connect-Itを更新します。
- 3 Connect-Itシナリオを1つずつ開きます。
- 4 各シナリオで、以下の操作を行います。
 - 1 Connect-Itのシナリオを開く際に警告メッセージが表示される場合は、メッセージを確認します。
 - 2 警告メッセージに応じてシナリオを訂正します。
 - 3 テスト用データを使ってシナリオを実行します。

- 4 テスト中に問題が発生する場合は、問題点を訂正します。

バージョン4.4.2システムデータをインポートする

- 1 AssetCenterを起動します。
- 2 ブロックされた旧フォーマットの本番データベースに接続します（[ファイル/データベースに接続]メニュー）。
- 3 [ファイル/インポート]メニューを選択してから、[スクリプトの実行]オプションを選択します。
- 4 スクリプト「upgrade.lst」（通常はC:\Program Files\Peregrine\AssetCenter\migration\fromxxxにあり、xxxは旧フォーマットの本番データベースのバージョン）を選択します。
- 5 [インポート]をクリックします。
- 6 [閉じる]をクリックします。
- 7 この操作によって取得するデータベースを4.4.2フォーマットの本番データベースと呼びます。



4 Windowsでのインストール

本章ではAssetCenterを初めてインストールする方法を説明します。

AssetCenterインストール前の注意事項

アンチウイルスプログラムをオフにする

AssetCenterのインストール中にアンチウイルスプログラムを起動していると、レジストリへのアクセスが遮断されるため、AssetCenterソフトウェアのインストールプログラムが正常に機能しない場合があります。

このため、AssetCenterのインストール前にアンチウイルスプログラムを終了することをお勧めします。

Oracleクライアント層のインストール

Oracleクライアント層（SQL*NetまたはNet 8）を不適切にインストールすると、アクセント記号のついた文字がAssetCenterでは適切に処理されない可能性があります。この問題は、例えばアクセント記号付きの文字を含むレコードの挿入時に発生します。このレコードを再選択すると、テキストは正常に表示されません。この問題を解決するには、SQL*NetまたはNet 8の設定を確認してください。

Crystal Reportsのインストールの有無

AssetCenterのインストールを実行する前に、Crystal Reportsランタイム（限定バージョン）をインストールする必要があるかどうか確認します。

完全バージョン8.5、9、または10がインストールされている場合、Crystal Reports 10 Runtimeをインストールしないでください。

注意:

Sybase SQL Anywhereランタイムのインストールは、AssetCenterのインストールプログラムと共に実行されます。

MSDEのインストールの有無

MSDEは、Microsoft SQL Serverの限定およびフリーバージョンです。

制約事項の例：

- SQL最適化ツールが提供されません。
- データベースへの同時接続数が制限されています。

AssetCenterではMSDEをデモ用データベースに使用します。

AssetCenterインストールCD-ROMを使用すると、必要に応じてMSDEをインストールできます。

注意:

制約事項があるため、MSDEは本番データベースに対してサポートされません。

MSDEがユーザの環境に既にインストールされている場合、そのバージョンがサポートされていればデモ用データベースにMSDEからアクセスすることができます。

サポートされるMSDEのバージョン（サーバ、クライアント、ネットワークプロトコル、ドライバなど）を確認するには、Webサイト<http://support.peregrine.com> [<http://support.peregrine.com>]で動作環境の表を参照してください。

AssetCenter付属のMSDEのインスタンスをインストールするには、

- 1 インストール用CD-ROMを挿入します。
- 2 CD-ROMを挿入してもインストールプログラムのウィンドウが自動的に表示されない場合は、
 - 1 Windowsエクスプローラを実行します。
 - 2 CD-ROMを選択します。
 - 3 CD-ROMのルートを選択します。
 - 4 「autorun.exe」プログラムを実行します。
- 3 オプション [Microsoft MSDEのインストール] を選択します。

- 4 インストールプログラムの指示に従います。
MSDEのインスタンスは、次のパラメータでインストールされます。

表 4.1. MSDE - インストールされたMSDEインスタンスに対するインストール設定

パラメータ	値
インスタンスの名前	ASSETCENTER
管理権限を持つユーザ	sa
ユーザsaに関連付けられているパスワード	saacpassword
セキュリティシステム	SQL
ネットワークプロトコル	有効

MSDEサービスを開始する

デモ用データベースをインストールする予定であれば、AssetCenterのインストールを開始する前に、使用するMSDE Windowsサービスを開始できることを確認します。

AssetCenter付属のMSDEサービスはMSSQL\$ASSETCENTERという名前です。

インストールプログラムからは開始できません。

ただし、次回Windowsを再起動したときに自動的に起動するように設定できます。

注意:

MSDEサービスに相当するサービスをWindows 98で開始する場合は、AssetCenterのインストール後にコンピュータを再起動します。

Windows 2000、XPおよびServer 2003のインストール

Windows 2000、XP、またはServer 2003を使用している場合、コンピュータにソフトウェアをインストールするには管理者権限が必要になります。管理者権限でログインしないと、インストールプログラムはレジストリを変更できません。

クライアント/サーバ型インストール

クライアント/サーバ型でAssetCenterをインストールする場合は、以下の手順に従います。

- 1 DBMSをサーバとクライアントコンピュータにインストールします。
- 2 クライアントとサーバ間の通信をテストします。
- 3 各クライアントコンピュータにAssetCenterをインストールします。

クライアントコンピュータへ迅速にインストールする

「amdb.ini」ファイルには、[ファイル/データベース接続の管理]メニューにある接続のリストが含まれています。

このファイルの場所：▶ .iniおよび.cfgファイル [修繕5]

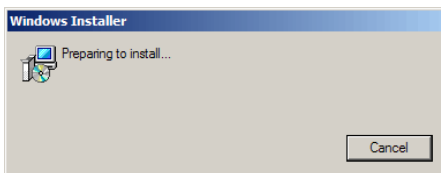
これらのオプションを各クライアントコンピュータのGUIで定義する代わりに、一度オプションを定義した後「amdb.ini」ファイルを各クライアントコンピュータにコピーします。

手動インストール (GUI)

- 1 インストール用CD-ROMを挿入します。
- 2 CD-ROMを挿入してもインストールプログラムのウィンドウが自動的に表示されない場合は、
 - 1 Windowsエクスプローラを実行します。
 - 2 CD-ROMを選択します。
 - 3 CD-ROMのルートを選択します。
 - 4 「autorun.exe」プログラムを実行します。
- 3 オプション [AssetCenter 4.4.2のインストール] を選択します。
- 4 インストールプログラムの指示に従います。

警告:

インストール時に、次の種類のポップアップウィンドウが数回表示されます。



これは正常です。

[キャンセル] をクリックしないでください。

キーボードの [Enter] を押しただけで [キャンセル] ボタンが選択されるので、インストールの実行中には他のアプリケーションを操作しないことをお勧めします。ポップアップウィンドウが表示されたことに気付かずに [Enter] を押すこととなります。

自動インストールとアンインストール (コマンドライン)

AssetCenterをグラフィカルインタフェースを使用せずにインストールすることも可能です。

- 概要 [[修 8](#)]
- 準備 [[修 8](#)]
- 実行 [[修 6](#)]
- コマンドラインからアンインストールを実行する [[修 8](#)]

概要

コマンドラインのインストールを使用すると、複数のコンピュータに対してAssetCenterのインストールを標準化および自動化することができます。

コマンドラインからインストールを実行するためには、特定のパラメータを定義する必要があります。

AssetCenterインストールパラメータは、.msiファイル内で定義されます。

デフォルトでAssetCenterインストールCD-ROM上で提供されるファイルは、AssetCenter.msiという名前です。

.msiファイルの変更は、Orcaという名前のMicrosoftのプログラムによって実行されます。

Orcaは、設定を実行するために使用するコンピュータにインストールする必要があります。

準備

Orcaをインストールする

Orcaをインストールするには

- 1 Microsoft Internet Explorerを起動します。



警告:

次のページを表示するためには、Microsoft Internet Explorer (c) version 5.0以上が必要です。

- 2 次のURLにあるページ [Platform SDK Redistributables] (プラットフォーム SDK再配布可能) を表示します。

<http://www.microsoft.com/msdownload/platformsdk/sdkupdate/default.htm?p=/msdownload/platformsdk/sdkupdate/psdkredist.htm>

- 3 [Windows Installer SDK] 説明ページを表示します (左のメニュー内の [Windows Installer SDK V2.0] リンク)。
- 4 次の手順に従い、Windows Installer SDKをインストールします。
- 5 Internet Explorerを終了します。
- 6 Windows Explorerを起動します。
- 7 Windows Installer SDKインストール先フォルダのbinサブフォルダ (通常は C:\Program Files\Microsoft SDK\Bin) の内容を表示します。
- 8 Orcaをインストールします (Orca.Msiを実行します)。
「Typical」インストールを選択します。
- 9 Windows Explorerを終了します。

Orcaの使用に関するヘルプの取得

Orcaのマニュアルを表示するには

- 1 インターネットブラウザを起動します。
- 2 次のURLにある「Orcaデータベースエディタを使用してWindowsインストーラファイルを編集する方法」を表示します。

<http://support.microsoft.com/kb/255905/>

.msiファイルとsetup.exeおよびmsiexec.exeパラメータに関するヘルプを取得する

これらのファイルに関するマニュアルを表示するためには、Microsoft Platform SDKオンラインヘルプを参照してください。

このオンラインヘルプは、Windowsの [スタート / プログラム / Microsoft Platform SDK XXX / Platform SDK Documentation] メニューで表示できます。

AssetCenterインストールを設定する

AssetCenterインストールを設定するとは、AssetCenter.msiファイルをOrcaで変更することです。

ここでは、.msiファイルの特定パラメータについてのみ説明します。

その他すべてのパラメータについては、.msiファイルのヘルプを参照してください。

- 1 Windows Explorerを起動します。

- 2 AssetCenterインストール先フォルダ（インストールCD-ROM、acフォルダ）の内容をハードドライブ（例えばC:/Temp/ac/）にコピーします。
- 3 Orcaを起動します。
- 4 AssetCenter.msiファイルを開きます（ [File / Open] ）。これは、コピーされたCD-ROMの内容を含むフォルダにあります。
- 5 インストールするコンポーネントを設定します。
 - a [Tables] 列で「Feature」を選択します。
 インストールの可能性があるコンポーネントのリストがOrcaによって表示されます。
 [Title] 列では、コンポーネントを特定することができます。
 [Level] 列では、コンポーネントのインストール方法を管理することができます。
 - b 次に示すように、コンポーネントごとに [Level] 列を入力します。

[Level] 列の値	コマンドラインからのインストール動作	「Typical」のGUIインストール動作	「Custom」のGUIインストール動作
0	インストールされない	インストールされない	N/A
1	インストールされる	インストールされる	デフォルトで使用可能で選択される
200	インストールされない	インストールされない	デフォルトで使用可能だが選択はされていない

- 6 作成するWindowsの [スタート] メニュー用プログラムグループを設定します。
 例えば、デフォルトでAssetCenterはPrograms/Peregrine/AssetCenterグループにインストールされます。
 パスを変更するには
 - a [Tables] 列で「Shortcut」を選択します。
 プログラムグループ項目ごとに行がOrcaによって表示されます。
 [Name] 列では、項目を特定することができます。
 [Directory] 列では、項目を作成するプログラムグループを指定します。
 それは、プログラムグループのパスを保存する [Directory] テーブルのレコードの識別子です。
 - b 変更するプログラムグループの識別子を記録しておきます。
 例：AssetCenterクライアントは、 [Name] 列の値「PEREGR-1|Peregrine AssetCenter」によって特定されます。 [Directory] 列の値は「newfolder2」です。この値を記録しておきます。

- c [Directory] テーブル内でこれらの識別子をそれぞれ検索します。
- d [Tables] 列で [Directory] を選択します。
- e [Directory] 列のヘッダーをクリックしてソートします。
- f 変更するプログラムグループごとに、 [Directory] 列でその識別子を選択し、 [DefaultDir] 列の値を変更します。
この例では、「newfolder2」を検索します。

**警告:**

ソートは大文字と小文字を区別します。そのため、「newfolder2」はリストの最後にあります。

- 7 設定を保存します ([File / Save] メニュー)。
- 8 終了します ([File / Close] メニュー)。

実行

概要

インストールを開始するには、AssetCenter CD-ROMのsetup.exeを実行します。
使用可能なパラメータを表示するには、次のコマンドを使用します。

```
setup.exe /?
```

パラメータにより初期化ダイアログボックスを非表示にする例を示します。

```
setup.exe /S
```

必要な場合にMsiExec.exeプログラムをインストールまたは更新すると、setup.exeが開始してから、MsiExec.exeが開始し、OrcaでカスタマイズしたAssetCenter.msiファイルの設定を使用してインストールを適切に実行します。

使用可能なパラメータを表示するには、次のコマンドを使用します。

```
MsiExec.exe /?
```

**警告:**

このオプションは、バージョン3以降でのみ使用可能です。

これより前のバージョンの場合、MsiExec.exeのバージョンに対応したマニュアルを参照してください。

GUIなしで操作せずにインストールできるようにするパラメータの実行例を次に示します。

```
MsiExec.exe /qn
```

パラメータをsetup.exeによってMsiExec.exeに送信するには、パラメータの先頭に以下の文字を付ける必要があります。

```
/V
```

操作せずにインストールできるようにするパラメータの実行例を次に示します。

```
setup.exe /V/qn
```



警告:

「/V」の後に続く文字は、空白なしで「/V」の直後に続ける必要があります。

コマンドラインからインストールを実行する

コマンドラインからAssetCenterをインストールするためには、さまざまな方法があります。

以下に例を示します。

- 1 DOSコマンドプロンプトを開きます。
- 2 setup.exeプログラムファイルとカスタマイズ可能なAssetCenter.msiファイルがあるAssetCenterインストール先フォルダに移動します。
- 3 以下のコマンドを実行します。

```
setup.exe /S /V"/qn /I* C:/Temp/log.txt INSTALLDIR="C:/Program Files/Peregrine/AssetCenter/"
```

コメント：

- setup.exe: msiexec.exeのローカルバージョンをテストして必要な場合は更新するために、setup.exeによってインストールをトリガします。



注意:

AssetCenterのインストールでは、バージョン2以上が必要です。

- /S: setup.exeを初期化ダイアログボックスなしで実行します。
- /V: 次のパラメータをmsiexec.exeに送信します。
「/V」に続く文字を囲む引用符に注意してください。
- /qn: msiexec.exeをユーザ入力またはGUIなしで実行します。
- /I* C:\Temp\log.txt: インストールプログラムの大部分のメッセージをC:/Temp/log.txtファイルに保存します。
- INSTALLDIR="C:\Program Files\Peregrine\AssetCenter\": AssetCenterをC:/Program Files/Peregrine/AssetCenterフォルダにインストールします。

ProgramとFilesの間のパスに空白を入れるために、「/」を使用していることに注意してください。

コマンドラインからアンインストールを実行する

コマンドラインからAssetCenterをアンインストールするには、さまざまな方法があります。

次の例をお勧めします。

- 1 AssetCenterアンインストールに相当するレジストリキー番号を特定します。
 - a レジストリエディタregedit.exeを起動します（Windowsの [スタート / ファイル名を指定して実行] メニュー）。
 - b 分岐点
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Uninstall をクリックします。
 - c AssetCenterに対応するキーを検索します。中括弧で囲まれたキーの詳細を表示し（左側のパネル）、DisplayNameフィールドの値を確認します（右側のパネル）。このフィールドには名前AssetCenterとそのバージョンが含まれます。
 - d このキーを選択します。
 - e キーの名前をコピーします（ [キー名のコピー] ショートカットメニュー）。
対象となる部分は、次に示すように中括弧の間にあります。

```
{A79E51C8-4E8E-40CE-A56E-143395D011C1}
```

- f レジストリエディタを終了します。
- 2 DOSコマンドプロンプトを開きます。
- 3 次の形式でコマンドを実行します。

- `msiexec.exe /x <レジストリキー> /qn /! * <ログファイルの完全パス>`
例：

```
msiexec.exe /x {A79E51C8-4E8E-40CE-A56E-143395D011C1} /qn /! * C:\Temp\log.txt
```

コメント：

- ▶ [コマンドラインからインストールを実行する \[修 7 \]](#)
- /x: msiexec.exeによりアンインストールを実行します。

注意:

コマンドラインからアンインストールを実行する場合、部分的にアンインストールすることはできません。

手動アンインストール (GUI)

AssetCenterをアンインストールする前に

AssetCenterをアンインストールする前に、手動で接続したMSDEデータベースを切断する必要があります。

例えば、デモ用データベースをAutoCADと統合している場合です。

▶ デモ用データベースのAutoCAD統合 [修繕2]

手動で接続したMSDEデータベースごとに次の操作を行います。

- 1 MSDEインスタンスがインストール済みであり、該当のWindowsサービス (AssetCenter付属のMSDEインスタンス用のMSSQL\$ASSETCENTER) が開始済みであることを確認します。
- 2 DOSコマンドプロンプトを開きます。
- 3 次のコマンドを実行します。
 - a 使用中のMSDEインスタンスのためにSQLエディタを開始するコマンドを入力します。

シンタックス :

```
osql -S <MSDEサーバ名> /<MSDEインスタンス名> -U <ユーザID> -P <ユーザパスワード>
```

AssetCenterと共にインストールされるMSDEインスタンスの例 :

```
osql -S (local) /ASSETCENTER -U sa -P saacpassword
```

注意:

NTセキュリティシステムでのMSDEインスタンスの場合、シンタックスは次のようになります。

```
osql -E <サーバ名>
```

- b データベースを切断するコマンドを入力します。

シンタックス :

```
exec sp_detach_db '<データベース名>', 'false'
```

例 :

```
exec sp_detach_db 'ACDemoAutoCADen', 'false'
```

- c 以下のコマンドを実行します。

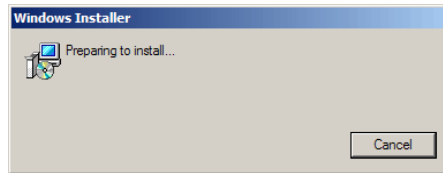
- 4 SQLエディタを終了する（ [終了] ）
- 5 DOSボックスを閉じる（ [終了] ）

AssetCenterをアンインストールする

AssetCenterをマシンから完全に削除するには、Windowsコントロールパネルの [アプリケーションの追加と削除] を使用します。

警告:

アンインストール時に、次の種類のポップアップウィンドウが数回表示されます。



これは正常です。

[キャンセル] をクリックしないでください。

キーボードの [Enter] を押しただけで [キャンセル] ボタンが選択されるので、アンインストールの実行中には他のアプリケーションを操作しないことをお勧めします。ポップアップウィンドウが表示されたことに気付かずに [Enter] を押すこととなります。

アンインストールプログラムは以下の操作を実行します。

- インストールされた全ファイルとプログラムグループを削除します。
- AssetCenterのインストールプログラムが加えた変更事項を、設定ファイルから削除します。
- レジストリを更新します。
- AutoCADのGUIからAssetCenter統合メニューを削除します。

5 Windowsでの設定

AssetCenterプログラムをインストールした後、使用するモジュールやAssetCenterに統合するモジュールに応じて補足操作を実行する必要があります。本章ではこれらの補足操作について説明します。

DB2データベース用のCコンパイラ

4.4データベースは、SQL言語のストアードプロシージャを使用します。SQL言語のストアードプロシージャをバージョン8.1以前のDB2で使用することは不可能なため、Cコンパイラが必要です。

 **注意:**

DB2バージョン8.2の場合は、これを無視してかまいません。

以下の手順に従います。

- 1 データベースサーバ上にCコンパイラをインストールします。

 **ヒント:**

DB2との統合を容易に実行できるので、Microsoft Visual Studioバージョン6をお勧めします。

- 2 Cコンパイラの位置をDB2サーバに知らせるために、DB2のインストール先フォルダの「function/routine/」サブフォルダにある「sr_cpath.bat」ファイルを更新します。

例：

標準「sr_cpath.bat」ファイルの次のセクションは、

```
@echo off
REM set VCV6_DRIVE=C: Microsoft Visual Studio
REM set include=%include%;%VCV6_DRIVE%\VC98\atl\include;%VCV6_DRIVE%\VC98\mfcc\include;%VCV6_DRIVE%\VC98\include
REM set lib=%lib%;%VCV6_DRIVE%\VC98\mfclib;%VCV6_DRIVE%\VC98\lib
REM set path=%path%;%VCV6_DRIVE%\Common\Tools\WinNT;%VCV6_DRIVE%\Common\MSDev98\Bin;%VCV6_DRIVE%\Common\Tools;%VCV6_DRIVE%\VC98\bin;%VCV6_DRIVE%\VC98\mfclib;%VCV6_DRIVE%\VC98\lib
```

次のセクションに置き換えられています。

```
@echo off
set VCV6_DRIVE=F: Program Files Microsoft Visual Studio
set include=%include%;%VCV6_DRIVE%\VC98\atl\include;%VCV6_DRIVE%\VC98\mfcc\include;%VCV6_DRIVE%\VC98\include
set lib=%lib%;%VCV6_DRIVE%\VC98\mfclib;%VCV6_DRIVE%\VC98\lib
set path=%path%;%VCV6_DRIVE%\Common\Tools\WinNT;%VCV6_DRIVE%\Common\MSDev98\Bin;%VCV6_DRIVE%\Common\Tools;%VCV6_DRIVE%\VC98\bin;%VCV6_DRIVE%\VC98\mfclib;%VCV6_DRIVE%\VC98\lib
```

Oracle DLL

Oracleアクセス用のDLLには様々なバージョンがあります。AssetCenterはサポートされているバージョンを動的に読み込みます。AssetCenterはDLLをバージョン番号の高い順から検索します。

- 1 oraclient10.dll
- 2 oraclient9.dll
- 3 oraclient8.dll

「am.ini」ファイルに以下のような項目を追加すれば、特定のDLLファイルを読み込むこともできます。

```
[DLL]
orcl = <xxx>.dll
```

このファイルの場所：▶ [.iniおよび.cfgファイル](#) [修繕5]

メッセージシステム

Windowsでサポートされているメッセージシステムの標準規格

- VIM
- Extended MAPI
- SMTP

 注意:

Simple MAPIはサポートされていません。

外部メッセージシステムのインストール

AssetCenterで外部メッセージシステムを正常に機能させるには、次の条件が必要です。

メッセージシステムの標準規格	必要な条件
VIM	システムのPATH環境変数に、「vim32.dll」ファイルが入っているフォルダのパスが指定されている必要があります。 例：Lotus NotesのDLLファイルのパスは、Notesにより「PATH」フォルダではなく「Notes」フォルダにインストールされています。
SMTP	TCP/IPレイヤを必ずインストールします。 SMTPメッセージシステムを正しくインストールした場合には注意します。

AssetCenterから外部メッセージシステムにメッセージを送信するための設定

メッセージシステムの機能を最大限に利用するには、次の作業を行う必要があります。

必要な作業	参考マニュアル
管理者およびユーザのメッセージ用アドレスを指定する。	『管理』マニュアルの「メッセージシステム」の章、「AssetCenterでメッセージシステムを指定する」の節

必要な作業	参考マニュアル
調達、ヘルプデスク、アラームなどで使う「メッセージ」タイプのアクションを作成する。	『AssetCenterの高度な使い方』、「アクション」の章、「アクションを作成する」の節、「[メッセージ]タブページに入力する」
調達、ヘルプデスク、アラームなどにリンクされているメッセージを送信する AssetCenter Serverを設定する。	『管理』マニュアルの「AssetCenter Server」の章
AssetCenter Serverを実行する。	『管理』マニュアルの「AssetCenter Server」の章
トラブルシューティング	『管理』マニュアルの「メッセージシステム」の章、「一般的な接続エラー」の節

メッセージシステムの使用方法については、以下の章を参照にしてください。

- 『管理』マニュアルの「メッセージシステム」の章
- 『AssetCenterの高度な使い方』マニュアルの「メッセージ」の章

AssetCenter Server

AssetCenter ServerはAssetCenterクライアントから独立したプログラムです。AssetCenterの調達、在庫、履歴、またはリースのドメインでトリガされるアラーム、メッセージやアクションをモニタしたり、特定のフィールドの値を計算したりします。

これらの処理が正しく行われるために、ユーザは先ず、少なくとも1台のコンピュータ上でAssetCenter Serverを常時稼動し、次にAssetCenter Serverを本番データベースに接続する必要があります。

AssetCenter Serverの詳細については、『管理』マニュアルの「AssetCenter Server」の章を参照してください。

AssetCenter ServerのモジュールはConnect-ItとConnect-Itのコネクタを使用し、以下のようなデータの自動インポートを実行します。

- AssetCenterと共にインストールされるDesktop Inventoryスキャナで実行されるスキャン（棚卸）
- 外部アプリケーションから来るデータのインポート

このようなモジュールを使用する場合はConnect-Itをインストールします。

Connect-Itの動作環境、またはインストール方法についてはConnect-Itのマニュアルを参照してください。

AssetCenter ServerとConnect-Itの統合方法については、AssetCenterの『管理』マニュアルの「AssetCenter Server」章の「AssetCenter Serverでモニタするモジュールを設定する」を参照してください。

WindowsでAssetCenter Serverを導入する

このプログラムにアクセスするには最低1台にWindows 2000かXP Professional、あるいはServer 2003 をインストールしなければなりません。

AssetCenter Serverは次の方法で起動できるようにインストールされます。

- Windowsの [スタート] メニューのショートカットから手動で起動
- サービスとして自動的に起動

ヒント:

AssetCenter Serverを、サービスとして起動させることをお勧めします。





注意:

AssetCenter Serverサービスを適切にインストールするには、以下の手順に従ってください。

- 1 Windows NTでユーザアカウントを作成します（サービスのインストール先コンピュータで）。
このアカウントには、AssetCenter Serverサービスの起動に必要な権限がなければなりません。
このアカウントの環境は、AssetCenter Serverサービスのコンピュータ上にインストールされたDBMSのクライアント層の使用を、許可しなければなりません。
ローカルシステムアカウントは、デフォルトではシステムの環境変数にしかアクセスしないことを念頭に置いてください。
- 2 AssetCenter Serverサービスをこのアカウント上にインストールします。

デフォルトでは、このプログラムのサービスが自動的に起動するように設定されていますが、これは変更可能です。

コントロールパネルの [サービス] を使うと、コンピュータで使用可能なWindowsサービスを開始、停止、設定できます。

- Windows 2000の場合
 -  ボタン：停止しているサービスを開始します。
 -  ボタン：サービスを停止します。
 -  ボタン：サービスを再起動します。
 -  ボタン：サービスを中断します。

AssetCenter Serverサービスを、Windowsの自動モードで起動するには、

- 1 サービスのウィンドウからAssetCenter Serverサービスを選択します。
- 2 右クリックし、ポップアップメニューで [プロパティ] を選択します。
- 3 [スタートアップの種類] フィールドを [自動] にします。

 注意:

AssetCenter Serverの場合は、一度正常に動作することを確認したら、スタートアップモードを [自動] に設定して、Windowsの起動時に自動的に開始させることをお勧めします。

 注意:

サービスは、デフォルトでWindowsのシステムアカウントを使用します。AssetCenter Serverがデータベースに接続できない場合は、[スタートアップ] ボタンをクリックして、データベースにアクセスできるアカウントを使うようにサービスを設定します。

Crystal Reports

Crystal Reportsのインストール、設定と使用については、マニュアル『AssetCenterの高度な使い方』の「Crystal Reports」の章を参照してください。

Connect-Itを統合する

AssetCenterにはConnect-It完全版と、マニュアルが付属しています。

必要なConnect-Itのバージョン

Connect-ItとAssetCenterを統合するには、AssetCenterインストール用CD-ROMに提供されているConnect-Itのバージョン、またはそれ以降が必要です。

Connect-Itの用途

AssetCenter Serverが自動的に起動する一部のアクションでは、Connect-Itが必要になります。例えば、

- AssetCenterデータベースへの接続時にNTセキュリティを使用するために、データベースにNTユーザを追加する場合

 **警告:**

AssetCenter ServerのWindowsバージョンが必要です。

- データベースにNTドメインで宣言されたコンピュータを取得する場合

 **警告:**

AssetCenter ServerのWindowsバージョンが必要です。

- AssetCenterとAutoCADを統合する場合
- 棚卸データをDesktop Inventoryからインポートするには、例えば次のように実施します。

Connect-Itの動作環境、またはインストール方法についてはConnect-Itのマニュアルを参照してください。

AssetCenter ServerとConnect-Itの統合方法については、AssetCenterの『管理』マニュアルの「AssetCenter Server」章の「AssetCenter Serverでモニタするモジュールを設定する」を参照してください。

リモートコンピュータのスキャン

AssetCenterでは様々な方法でリモートコンピュータをスキャンできます。

この種のスキャンを実行する方法は数種あります。

リモートコンピュータのスキャン方法については、AssetCenterの『ポートフォリオとソフトウェアライセンスマニュアル』「ITポートフォリオ」の章、「コンピュータ」の節に説明されています。

AutoCADを統合する

本節はAutoCADを購入したユーザを対象にしています。

AutoCADモジュールをインストールする

「acadi.exe」をDOSコマンドプロンプトで実行すれば、AutoCADモジュールをインストールできます。「acadi.exe」は、AssetCenterのインストール先フォルダのサブフォルダ「acadi」内にあります。



警告:

「acadi.exe」を実行できるようにするには、AutoCADを1回以上起動しておく必要があります。

「acadi.exe」プログラムはWindowsレジストリを変更し、AssetCenter統合メニューがAutoCADのGUIで表示されるようにします。

AutoCADの動作環境とAutoCADのインストール方法

AutoCADの動作環境とインストール方法については、AutoCADのマニュアルを参照してください。

サポートされるAutoCADのバージョン

AutoCADを統合するには、以下のソフトウェアが必要になります。

- AutoCADバージョンR14またはR15（英語版のみ）
- Connect-It（AssetCenterインストール用CD-ROMに提供されているConnect-Itのバージョン、またはそれ以降）

AutoCADと互換性のあるAssetCenterデータベースを作成する

AssetCenter Database Administratorでは、AutoCAD統合をサポートするAssetCenterデータベースを作成できます。

AutoCADをサポートするデータベースを作成するには、以下の手順に従います。

[AutoCAD統合を使用] オプションを選択し、AssetCenterの『管理』マニュアルの「AssetCenterデータベースの作成」の章、「AssetCenterデータベースの作成、変更、削除」の節に説明されているステップを実行します。

既存のデータベースをAutoCADと互換性があるように変更するには

- 1 AssetCenter Database Administratorを開始します。
- 2 データベース記述ファイルを次のように開きます。
 - a [開く]ウィンドウを表示します([ファイル/開く])。
 - b [データベース記述ファイルを開く(新規データベースの作成)]オプションを選択します。
 - c オプションを確認します([OK])。
 - d gbbase.xmlファイルを選択します。このファイルは、完全パスが通常 C:/Program Files/Peregrine/AssetCenter/config/gbbase.xmlであるAssetCenterインストール先フォルダのconfigサブフォルダ内にあります。
 - e ファイルを開きます([開く])。
- 3 データベース構造を作成するウィザードを開始します([アクション/データベースの作成]メニュー)。
- 4 次のようにウィザードのページに入力します(ウィザードページを[次へ]と[戻る]で移動します)。

[SQLスクリプトの生成/データベースの作成]ページ:

フィールド	値
データベース	互換可能なデータベースを選択します。
作成	専門分野データをインポート
高度な作成オプションを使用	このオプションを選択します。

[作成パラメータ]ページ:

フィールド	値
パスワード	管理者のパスワード
	<p>注意:</p> <p>AssetCenterデータベース管理者は、[名前] (Name) フィールドが「Admin」に設定されている [部署と従業員] (amEmplDept) テーブルのレコードです。</p> <p>データベース接続ログインが [ユーザ名] (UserLogin) フィールドに保存されていません。管理者名は「Admin」です。</p>

[システムデータの作成]ページ:

フィールド	値
タイムゾーンの使用	このオプションは選択しません。
フィールドのヘルプの使用	このオプションは選択しません。
AutoCAD統合の使用	このオプションを選択します。

[インポートするデータ] ページ :

フィールド	値
使用可能データ	すべてのオプションをオフにします。
エラー発生時にインポートを中止	このオプションは変更しません。
ログファイル	このオプションは変更しません。

- 5 データベースの変更を確定します ([終了] ボタン)。
- 6 [データベースの作成] ページ上のメッセージを調べて、このページを閉じます ([OK] ボタン)。

この章には、Connect-ItをAutoCAD統合モジュールと使用する場合の情報も含まれています。

AutoCAD、Connect-ItとAssetCenterを統合する

AutoCADとAssetCenterの統合方法については、AssetCenterの『管理』マニュアルの「AutoCADの統合」の章を参照してください。

Get-Answers

Get-Answersの動作環境とインストール方法については、Get-Answersのマニュアルを参照してください。

Get-AnswersとAssetCenterの統合方法については、AssetCenterの『はじめに』マニュアルの「Get-Answers」の章を参照してください。

デモ用データベース

AssetCenterがデモ用データベースと共にインストールされます。

これらのデータベースには以下の特徴があります。

- AssetCenter付属のライセンスファイル (license.cfg) を使うとアクセスできません。
このファイルはソフトウェアの全部または一部へのアクセスを許可します。
- AssetCenter ServerとAssetCenter Database Administratorでアクセスできます。

AutoCAD統合を伴わないデモ用データベース

AutoCAD統合を伴わないデモ用データベースが、AssetCenterのインストール先フォルダのサブフォルダ「acdemo」にコピーされています。

該当ファイルは、ACDemo44.mdfです。

注意:

インストール時に、ユーザが「itam」でパスワードが「password」であるインスタンスを使用して、デモ用データベースがMSDEに宣言されます。

データベースへの接続

- 1 MSDEインスタンスがインストール済みであり、該当のWindowsサービス (AssetCenter付属のMSDEインスタンス用のMSSQL\$ASSETCENTER) が開始済みであることを確認します。
- 2 AssetCenterを起動します。
- 3 AssetCenterに [データベースに接続] ウィンドウが表示されます。
このウィンドウへ次のように入力します。

フィールド	値
接続	ACDemo44jp
ログイン	Admin
パスワード	空

注意:

他のログインも使用できます。

- 4 デモ用データベースに最初に接続するときに、 [ライセンスファイル] ウィンドウが表示されます。
AssetCenterに添付されたライセンスファイルlicense.cfgを選択します。

デモ用データベースのAutoCAD統合

AutoCAD統合をサポートするデモ用データベースが、AssetCenterのインストール先フォルダのサブフォルダ「acad44.db」にコピーされます。該当ファイルは、acad44.mdfです。

データベースの宣言

- 1 MSDEインスタンスがインストール済みであり、該当のWindowsサービス（AssetCenter付属のMSDEインスタンス用のMSSQL\$ASSETCENTER）が開始済みであることを確認します。
- 2 DOSコマンドプロンプトを開きます。
- 3 次のコマンドを実行します。

- a 使用中のMSDEインスタンスのために、SQLエディタを開始するコマンドを入力します。

シンタックス：

```
osql -S <MSDEサーバ名> /<MSDEインスタンス名> -U <ユーザID> -P <ユーザパスワード>
```

AssetCenterと共にインストールされるMSDEインスタンスの例：

```
osql -S (local) /ASSETCENTER -U sa -P saacpassword
```

 **注意:**

NTセキュリティシステムでのMSDEインスタンスの場合、シンタックスは次のようになります。

```
osql -E <サーバ名>
```

- b データベースacad44.mdfを宣言するコマンドを入力します。

シンタックス：

```
exec sp_attach_single_file_db '<データベース名>', '<データベースファイルの完全パス>'
```

例：

```
exec sp_attach_single_file_db 'ACDemoAutoCADjp, 'C:\Program Files\Peregrine\AssetCenter\acad44.db\acad44.mdf'
```

- c 以下のコマンドを実行します。

```
go
```

 注意:

通常は、データベースの.logファイルに相当する警告メッセージがMSDEによって表示されます。

ほとんどの場合、このメッセージは無視できます。

- 4 SQLエディタを終了します（ [終了] ）。
- 5 DOSボックスを閉じます（ [終了] ）。
- 6 AssetCenterを起動します。
- 7 データベースへの接続を行いません（ [キャンセル] ）。
- 8 接続リストを表示します（ [ファイル/データベース接続の管理] ）。
- 9 接続作成ウィンドウを表示します（ [新規作成] ）。
- 10 次のようにフィールドに入力します。

フィールド	値
名前	選択した名前（例：ACDemoAutoCADjp）
エンジン	Microsoft SQL Server
データソース	ACDemo44jp(SQL Server)
データベース	ACDemoAutoCADjp
ユーザ	sa
パスワード	saacpassword
所有者	itam

- 11 接続を作成します（ [作成] ）。
- 12 作成をテストします（ [テスト] ）。

データベースへの接続

- 1 MSDEインスタンスがインストール済みであり、該当のWindowsサービス（AssetCenter付属のMSDEインスタンス用のMSSQL\$ASSETCENTER）が開始済みであることを確認します。
- 2 AssetCenterを起動します。
- 3 AssetCenterに [データベースに接続] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、次のように入力します。

フィールド	値
接続	ACDemoAutoCAD44jp
ログイン	Admin

パスワード

空

 注意:

他のログインも使用できます。

- 4 デモ用データベースに最初に接続するときに、[ライセンスファイル] ウィンドウが表示されます。
AssetCenterに添付されたライセンスファイルlicense.cfgを選択します。

6 | .iniおよび.cfgファイル

AssetCenterスイートに属するプログラムは、設定ファイル（.iniおよび.cfg拡張機能）に関連付けられています。

使用可能な.iniおよび.cfgファイル

使用できる主な.iniおよび.cfgファイルの一覧を次に示します。

表 6.1. .iniおよび.cfgファイル - 主なファイルの一覧

プログラム（Windowsでは.exeまたは.dllを追加し、Unixでは.soを追加）	.iniまたは.cfg	説明
AssetCenter am	aamds44.ini	ユーザ表示オプション すべてのウィンドウをデフォルト設定に戻す場合は、このファイルを削除します。
	am.ini	AssetCenterユーザオプション
AssetCenter Database Administrator amdba amdbal	amdba.ini amdbal.ini	AssetCenter Database Administratorユーザオプション ユーザ表示オプション

プログラム (Windowsでは.exeまたは.dllを追加し、Unixでは.soを追加)	.iniまたは.cfg	説明
AssetCenter Export amexp amexpl	amexp.ini amexpl.ini	AssetCenter Exportユーザオプション ユーザ表示オプション
AssetCenter Import amimpl	amimpl.ini	AssetCenter Importユーザオプション ユーザ表示オプション
AssetCenter Script Analyzer amsq	amsq.ini	AssetCenter Script Analyzerユーザオプション ユーザ表示オプション
AssetCenter Serveur amsrv amsrvl	amsrv.ini amsrv.cfg amsrvl.ini amsrvcf.ini	AssetCenter Serverユーザオプション ユーザ表示オプション Webサーバとして実行中のAssetCenter Serverのパラメータ
AssetCenter API aamapi44	aamapi44.ini	ユーザオプション
次のプログラムのすべて	amdb.ini mail.ini	データベース接続のリスト AssetCenterメッセージシステム設定

表 6.2. .iniおよび.cfgファイル - 主なファイルの場所

.iniまたは.cfgファイル	場所
aamdisk44.ini	Windows 9xまたはME: Windowsルートイン ストール先フォルダ
am.ini	Windows (NT系) : \<Documents and Settings>\<Windowsユーザ>フォルダ
amdba.ini	Unix: ~/Peregrine/フォルダ
am.ini	
amdba.ini	
amdbal.ini	
amexp.ini	
amexpl.ini	
amimpl.ini	
amsq.ini	
amsrv.ini	
amsrvl.ini	
aamapi44.ini	
amsrvcf.ini	amsrv実行可能ファイルと同じフォルダ

.iniまたは.cfgファイル	場所
amsrv.cfg	amsrv実行可能ファイルと同じフォルダ 注意: 旧バージョンのAssetCenterからアップグレードしている場合、amsrv.cfgが実行可能ファイルamsrvの親フォルダにある場合があります。これも機能します。
amdb.ini	Windows 9xまたはME: Windowsルートインストール先フォルダ Windows (NT系): <ul style="list-style-type: none"> ■ システム接続: Windowsルートインストール先フォルダ ■ ユーザ接続: <Documents and Settings><Windowsユーザ>フォルダ Unix: <ul style="list-style-type: none"> ■ システム接続: /etc/Peregrine/フォルダ ■ ユーザ接続: ~/Peregrine/フォルダ
mail.ini	Unix: ~フォルダ

「.ini」ファイルを変更する

「.ini」ファイルのエントリは次の場合に変更されます。

- プログラムにより自動的に変更：変更を確定したときまたはプログラムを終了するときに保存されます。この場合、[ファイル/終了]を使ってアプリケーションを終了しない場合は、変更は保存されません。
- 手動で変更

可能な限り、AssetCenterプログラムから「.ini」ファイルエントリを変更するようにしてください。

ただし、手動でしか作成および変更できないエントリもあります。

注意:

注意：「.ini」ファイルの変更は複雑な場合があります。その場合は、変更するのに必要な十分な知識が必要です。

次の表に、手動でしか変更できない「.ini」ファイルを示します。

**注意:**

注意：次の表では、「.ini」ファイルのエントリの一部だけを紹介します。すべてのエントリが記載されているわけではありません。この表にないセクションとエントリは、手動では変更できません。

一部のブールエントリの値を「1」または「0」で示します。「1」は「True」、「0」は「False」を表します。

Am.iniファイルエントリ

[OPTION] セクション

表 6.3. [OPTION] セクション

エントリ	説明
bSaveOptionOnExit	プログラムを使って [Option] に加えた変更を、AssetCenter終了時に保存しない場合は、「0」に設定します。 デフォルトでは、変更内容は保存されます。
CmdComboLines	ツールバーから選択可能なビューおよびアクションのリストに表示する項目数を制限します。
CNtbkTabCfgbShowFlyby	詳細画面のタブページでツール名を表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 0：いいえ ■ 1：はい
KeyIniFileName	aamdisk44.iniファイルのパスを指定します。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content;">KeyIniFileName=aamdisk44.ini</div> 例 AssetCenterはファイルaamdisk44.dllを使用します。このファイルはネットワークドライブに存在する可能性があります。この場合、このファイルを読み取り専用として設定し、ユーザが設定を変更できないようにすることができます。
NewMailLastCheck	AssetCenterメッセージが最後に読み取られた時間。 単位：1970年1月1日午前0時から経過した秒数

エントリー	説明
opt_bAskForConcurrentModifications	<p>このエントリーでは、ユーザが [変更] ボタンをクリックしたときに、別のユーザが同じレコードを変更している場合に、確認ダイアログボックスを表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1：確認ダイアログボックスを表示する。 ■ 0：確認ダイアログボックスを表示せず、変更を自動的に保存する
opt_bCommitDeletesOneByOne	<p>このオプションは、レコードのグループを削除するときに役立ちます。有効にすると、レコードは1つずつ削除されます（1回のトランザクションにつき1個のレコード）。それ以外の場合は、1回のトランザクションですべてのレコードが削除されます。</p> <p>デフォルト値：0</p>
opt_ImportCacheSize	<p>調整キーを使ってデータをインポートするときに、インポートパフォーマンスを改善できるメモリキャッシュのサイズを示します。</p> <p>単位：検出されたレコード数</p> <p>デフォルト値：100</p>
StartSunday	<p>週を月曜日から始めるか（StartSunday=0）、日曜日から始めるか（StartSunday=1）を指定します</p> <p>このオプションは、カレンダーで使われます。</p>

[SQL] セクション

表 6.4. [SQL] セクション

エントリー	説明
OracleDLL	Oracleと対話するために読み込むOracle DLLの名前を設定します。

「Amsrv.ini」ファイルのエントリ

[OPTION] セクション

表 6.5. [OPTION] セクション

エントリ	説明
MaxRentPerTrans	このエントリは、賃貸料の作成に使われ ません。 トランザクション単位の賃貸料の最大計算 数を設定します。 デフォルト値：200
MaxMsgInList	AssetCenter Serverのメインウィンドウのリ ストに表示する行数を設定します。 デフォルト値：5000
<モジュール>LastCheck <モジュール>の値は、Alarms、 CostCenter、History、LostVal、Rent、 Stats、Stock、TimeZone、UpdateToken、 WkGroup、WkGroup <xxx>、 WorkflowFinderのいずれか。	LastCheckという接尾語を持つ行は、モ ジュールの最後の実行日に対応します。 AssetCenter Serverを再起動したときに、モ ジュールを次に実行する日付を計算できま す。 実行グループ<xxx>が存在しない場合は、 プログラムは自動的にこれを実行する必要 がないので、WkGroup <xxx> LastCheck行 (または、実行グループなしのワークフ ローチャートがない場合は WkGroupLastCheck行)を削除できます。

Amsrvcf.iniファイルエントリ

amsrvcf.iniファイルエントリについては、インストールで作成されるこのファイ
ル自身に記述されています。

Amexp.iniファイルエントリ

[OPTION] セクション

表 6.6. [OPTION] セクション

エントリ	説明
MaxOldDoc	[ファイル] メニューに保持される最近使用したファイルの最大表示数。

「Amdb.ini」ファイルのエントリ

AssetCenterのセクションに対応する各セクションごとに、次のエントリを変更できます。

表 6.7. 「Amdb.ini」ファイルのエントリ

エントリ	説明
AmApiDll	AssetCenterのaamapi44 API DLLのパスを設定します。 このエントリは、Connect-ItとOAAに使用されます。
FetchingArraySize	SQLステートメントの実行時にパケットによってフェッチされる行数。 デフォルト値：30
OdbcLockingTime	Microsoft SQL Serverデータベース（MSDEを含む）の場合、レコードが別のユーザによってロックされたと見なされるまでの時間を設定します。 単位：秒 デフォルト値：60 警告: この値が小さすぎると、処理量の多いサーバで実行する場合にインポートが中断されることがあります。

エン트리	説明
OldStyleCatalog	Oracle for WorkGroupsデータベースの場合は、このエントリで、デフォルトの「All_Catalog」ビューの代わりに「Tab」ビューを強制的に使用できます。 次の2つの値のどちらかに設定できます <ul style="list-style-type: none">■ 1 : Tabを使う。■ 0 : All_Catalogを使う。

.iniファイルの変更を管理する

.iniファイルは、オプション変更時にそれぞれのアプリケーションによって自動的に変更されます。

複数の実行可能ファイルまたは実行可能ファイルのインスタンスが同じ.iniファイルに関連付けられている場合、最後に変更を保存した実行可能ファイルの変更内容が書き込まれます。

これらの変更を管理したい場合は、.iniを読み取り専用にすることをお勧めします。

これは、特にaamapi44.iniファイルに当てはまります。

7 | 性能の最適化

概要

AssetCenterの性能は様々な要因に左右されます。

- DBMSの性能
- DBMSのパラメータ設定
この操作は非常に重要なため、実行するにはデータベース管理の知識と経験が必要になります。DBMSのパラメータ設定によってはAssetCenterの性能が倍増することもあります。特に、データベースサーバに割り当てるRAM容量に注意を払うことが大切です。
- DBMSの機能（AssetCenterとの運用性）とミドルウェアの機能（複数の行を1つのネットワークパケットとして取得するなどの高度な機能のサポート）
- プロセッサの速度
- サーバのハードウェアの性能：RAM、ディスクサブシステム（ディスク、コントローラボード、これら要素のシステム管理、プロセッサ数など）、テーブルおよびインデックス専用の記憶装置
- クライアントのハードウェアの性能：RAM、グラフィック処理の性能（グラフィックアクセラレータボードの使用と必要最低限RAMの倍増を推奨。）
- ネットワークの速度と待ち時間（応答時間を改善するには、ネットワーク速度を上げて待ち時間を短縮します。）
- データベースに格納されているレコード数

低速ネットワーク、高速ネットワークと広域ネットワーク (WAN) の調整

詳細については、マニュアル『管理』の「WANネットワークにおけるAssetCenterの最適化」の章を参照してください。

外部アプリケーションを使ってAssetCenterデータベースのレコードをロックする

外部ツールによっては、レコードを参照している最中でもレコードをロックすることがあります。

これは、AssetCenterの性能に悪影響を及ぼします。レコードは、なるべくロックしないようにしてください。

例えば、Sybase SQL ServerやMicrosoft SQL Serverでは、ダーティリード (dirty read) でアクセスする方が適しています。

インデックス

PEREGRINE

- .msi (ファイル), 43
- アクセス制限, 33
- アップグレード
 - コンピュータのアップグレード, 23
 - バージョン4.2.xまたは4.3.x
 - バージョン4.4.0以上, 20
 - 手順, 28
- アンインストール
 - AssetCenterクライアント
 - 自動アンインストール, 48
 - 手動アンインストール - Windows, 49
 - アンインストール - Windowsでの自動化, 43
 - アンチウイルス - 競合, 39
- インストール
 - Windows, 39-49
 - 事前の作業, 39
 - 手動インストール, 42
 - 自動化 - Windows, 43
 - カウンタ, 27
 - キャッシュ, 34
 - クライアント/サーバ - Windowsインストール, 41
 - コンピュータのアップグレード
 - 準備, 23
 - サポートされるDBMS, 17
- サポートされるオペレーティングシステム
 - クライアント, 15
 - データベースサーバ, 15
- サポートされる動作環境, 15
- スキャン, 57
- ストアドプロシージャ - DB2, 51
- ディスク容量
 - 最小限の動作環境 - Windows, 16
 - 推奨される動作環境 - Windows, 16
- デモ用データベース
 - インストール - Windows, 61
 - パスワード, 60
 - ログイン, 60
- データベース
 - AutoCADとの互換性, 58
 - AutoCAD互換データベース, 59
 - コピー, 27
 - DBMSツール, 28
 - 従来のバックアップ - 問題点, 27
 - 最終確認, 31
 - 手動による調整, 26
 - 整合性 - 検証, 30, 25
 - 接続不可, 56
 - 内容を変更する, 10
 - 保水性, 10

- データベースの更新 (メニュー), 29
- データベースの修復 (メニュー), 26, 25
- データベース構造 - 変更, 10
- データベース保水性, 10
- ネットワーク - パフォーマンス, 74
- パスワード - デモ用データベース, 60
- パフォーマンス, 73
- パフォーマンスの最適化, 73
- フィールドのヘルプ, 32
- メッセージシステム, 53 (参考 メッセージシステム)
- メモリ
 - 最小限の動作環境 - Windows, 16
 - 推奨される動作環境 - Windows, 16
- ユーザプロファイル, 33
- ユーザ権限, 33
- ユーザ (フィールド), 29
- レコードの整合性のチェック (オプション), 30, 26, 25
- レコード - ロック, 74
- レポート (参考 Crystal Reports)
- ログイン - デモ用データベース, 60
- ワークフロー (モジュール), 27
- 解析のみ, 30
- 開く (メニュー), 26, 25
- 既存のデータベースを開く (メニュー), 29
- 最小限の動作環境 - Windows, 16
- 周辺プログラムの統合, 14
- 修復 (オプション), 26, 25
- 所有者 (フィールド), 29
- 整合性 - 検証, 30
- 接続, 35
- 設定
 - Windows, 51-60
- 調達 (モジュール), 27
- 変換速度, 24

A

- acad44.db, 62
- acadi.exe, 58
- am.ini, 52
- am44.db, 61
- amdb.ini, 42
- AssetCenter

- コンポーネント (参考 AssetCenterのパッケージ)
- モジュール (参考 AssetCenterモジュール)
- AssetCenter.msi, 43
- AssetCenter Database Administrator
 - データベース整合性 - 検証, 30, 25
- AssetCenter Server, 34
 - Connect-It - 統合, 54
 - サービスとしての実行, 55
 - データベースに接続する
 - Windows, 56
 - はじめに, 54
 - 実装
 - Windows, 55
 - 設定
 - Windows, 54
- AssetCenter Web, 35
- AssetCenterクライアント
 - 高速インストール - Windows, 42
 - 自動アンインストール - Windows, 48
- AssetCenterコンポーネント, 13
- AssetCenterの周辺プログラム, 14
- AssetCenterプログラム - 更新
 - 手順, 34
- AssetCenterモジュール, 14
- AutoCAD
 - AssetCenterとの統合, 57, 57
 - Connect-ItとAssetCenter, 60
 - Connect-It - 統合, 58
 - デモ用データベース (参考 互換性のあるデモ用データベース)
 - データベース
 - 既存のデータベースに互換性を持たせる, 59
 - 互換データベースを作成する, 58
- autorun.exe, 42

C

- cfg (ファイル)
 - 一覧, 65
- config (フォルダ), 32
- Connect-It, 36
 - AssetCenter Server - 統合, 54
 - AssetCenter - 統合, 56

AutoCAD - 統合, 58
Connect-Itのシナリオ, 36
CPU

最小限の動作環境 - Windows, 16
推奨される動作環境 - Windows, 16

Crystal Reports

AssetCenterとの統合, 56
Windowsインストール, 40

Crystal Reports Runtime - Windowsインストール, 40

D

Dirty read, 74

G

gbbase.xml, 32
Get-Answers, 60
Get-It, 36
Get-Resources, 36

I

ini (ファイル)
一覧, 65
変更, 67

M

MAPI (参考 メッセージシステム)
MSDE, 40
Windows 2000、XPとServer 2003, 41
サービスを開始する, 41

N

NTユーザ, 56

O

Oracle, 39
Oracle DLL - バージョン, 52
Oracleクライアント層 - Windowsインストール, 39
Orca, 43

S

sdu.log, 30

SMTP (参考 メッセージシステム)
sr_cpath.bat, 52

U

up_GetCounterVal (ストアドプロシージャ), 27
up_GetCounterVal (ストアドプロシージャ), 31
upgrade.lst, 37

V

VIM (参考 メッセージシステム)

W

Windowsインストール, 40

